

## 中山間地域の地域振興

### Local Promotion in Mountainous Regions

杉山 光信

SUGIYAMA, Mitsunobu

私が 2006 年から学生たちと一緒に毎年訪れている京都府綾部市での地域振興の試みについて話をしてみたい。過疎高齢化に対してどうするか、問題に取り組む地域の人びとの試みのうちに新しい人間関係の作り方が含まれているし、そのことは 3.11 以後に論じられることになる問題と通底することがあるように思われる。

#### 1 綾部市について

なぜ綾部市なのか、また綾部市の NPO 法人「里山ねっと・あやべ」とどうしてかかわることになったかについてはおいおい説明していくことにして、初めに綾部市についてかんたんにふれておこう。

綾部市は京都府の北西部に位置し、西隣は福知山、北は舞鶴に接している。京都駅から山陰線特急に乗るとほぼ 1 時間、ということは京都へ通勤するには遠すぎる土地である。日本海に近い（天橋立や城崎温泉はすぐそば）。

綾部市の人口は 3 万 5 千人ほど。市域はかなり広くて 350 平方キロメートルありこれは近畿圏の自治体では 4 番目ということだがその 4 分の 3 は山林が占める。人口も 3 分の 1 は市の南西部にある綾部町（市役所と JR 駅がある）に集中している。

綾部市はアパレルメーカーのグンゼ発祥の地としても知られている。グンゼの本社社屋はいまは大阪市内にあるが、登記上の本社はいまでもここで、かつての工場跡地は研究所と博物館になっている。も

う一つ知られていることがあって、それは大本教の本部があること。大本教は戦前に皇室に対する不敬な教義を含んでいるとされ弾圧された歴史をもつ（1935 年には本部建物を爆破され、教主など 2 千人が拘留されている）が、今日では広く国際文化交流の活動を行っていることで知られる。本部境内には外国人の姿もよく見られる。

とはいえ、全体の印象はといえば綾部市は過疎の山間の都市である。豊里、物部、志賀郷、上林などの地区は昭和の町村合併の時に綾部市に合併された。おもしろいのはこの地方は古代律令時代の国制でいう丹波国であるが、合併でできた現在の綾部市は丹波国を構成した 6 郡のうちの何鹿郡とほとんど重なっていること。山林が市域の 4 分の 3 ということが示すように地域全体が小さな盆地の連なりからなっていて、国 - 郡 - 郷という区分、あるいは中世の荘園、そして今日の行政区分はどうしても重なることになる。

綾部市も地方の山間の都市の例にもれず近年、人口減少の傾向がとまらない。

人口の減少率は京都府にある 26 市町村のなかでは 17 番目だから飛び抜けて減少が大きいわけではない。中程度というところである。だが綾部町などの市街地をのぞくと過疎の山村地域が広がる。市内 195 集落のうちいわゆる「限界集落」は 2008 年の時点で 35 集落あった。

|      |        |
|------|--------|
| 1970 | 44,983 |
| 1975 | 43,490 |
| 1980 | 42,552 |
| 1985 | 41,903 |
| 1990 | 40,595 |
| 1995 | 39,981 |
| 2000 | 38,881 |
| 2005 | 37,755 |
| 2010 | 35,849 |

表 綾部市の人口

出所) 綾部市統計課 HP から引用

## 2 前市長・四方八洲男の存在

綾部市が過疎高齢化対策で全国の先頭に立ち知られるようになるにあたっては前市長の四方八洲男の存在にふれないわけには行かない。四方八洲男は1998年に綾部市長になった（それに先立ち1978年から市会議員を2期、1987年から京都府議会議員を3期つとめている）。この年、府議をやめて綾部市長になったのである。

市長になって初めの2期、綾部市内に「限界集落」があることはある程度知っていた。本人の表現によると、しかし「見て見ぬふりをしていた」。四方八洲男の考えを変えさせたのは市長3期目をめざす選挙運動期間中に豪雪に埋もれる市内でもっとも奥地になる集落を訪れたことであった。そこで「限界集落」の実情を自分の目でたしかめることになった。10戸から20戸の住民に集まってもらい車座になって話を聞いた。

このときの経験を四方八洲男は後になってこう言っている。奥地の3つの集落を訪れたのだが、そのうちの二つは住んでいる人びとに元気がなかった。

ところが一つだけ他とちがっているところがあった。それは上林地区の奥にある市志集落で、ここの高齢化比率は100パーセント（全員が65歳以上）、世帯数は14、人口は21人、一人暮らしの老人世帯が7、あとの世帯は複数人いるが子どものいない年寄り世帯。市志集落で集まってもらおうと21人全員が出てきた。なぜほかの「限界集落」とはちがって元気があるのだろうか？ その理由は集落の人たちで独自の活動をすすめているからなのである。集落の人たちでヤマフキ（山蓴）を2町歩（2ヘクタール）くらい栽培して、農協に出荷する。そして650万円くらいの粗収入をあげている。また毎月一回、女性たちはとくに用事がなくても集まって茶飲み話をしている。それだけではなかった。毎年、お盆の8月14日には市志を出て都会で働く子どもたちが家族を連れて帰ってくる。友人や会社の同僚まで連れて帰ってくる。いつもなら住民は21人しかいないのにこのときは70人くらいになる。そして盆踊り、バーベキュー、カラオケ大会。住民が高齢者ばかりなのに元気がいい理由はこうした活動にあったのだが、それを可能にしていたのはしっかりしたリーダーがいたから、一人だけでなく代々引き継ぐリーダーがいたからなのである。

そこで四方八洲男は考えることになる。「限界集落」になったからといって、もうどうしようもない、ということではないだろう。条件さえそろえば集落の再生は可能であるのだ。その条件とはなにか？

- (1) 産業がしっかりあること（ヤマフキの栽培）、
- (2) コミュニティがしっかり存続していること、
- (3) 交流があること、とくに都会との交流があること、
- (4) リーダーが存在すること。

そして四方八洲男は3期目の綾部市長に当選するとすぐに「限界集落」再生のための検討会を立ち上

げる。綾部市の北部にあるこれら集落はたいてい谷筋の奥に位置しているので冬にはかなりの積雪になる。雪下ろし作業が大変。またシカとイノシシも沢山いるのでヤマフキだけでなく、自分の家で食べる野菜を作るのにも柵を作り網をかける必要がある。こういう条件にある集落の再生のために、検討会は8月に報告書をつくり 2006 年 12 月の定例市議会で「水源の里条例」を採択したのである。

「水源の里条例」は適用の対象を 4 つの条件をみたすものとしている。(1) 市役所から 20 キロメートル以上離れていること、(2) 高齢者比率が 60 パーセント以上であること、(3) 集落の世帯数が 20

戸未満であること、(4) 自治会が水源地域に位置していること。この条件をみたすのは、市志、古屋、栃、大唐内、市茅野の 5 集落である。共通しているのはいずれも日本海型の気候で冬には積雪が多い。谷川沿いの小さな水田（稲作）とヤマフキの栽培などのほかは住民の収入は主に年金である。市街地から遠く買い物、通院、通勤に不便であり、また自治会の役員のなり手がなく、空き家が増えている。しかし背後に水源を控えていて、これを涵養しなくてはならない（放置すると産廃業者に買われてゴミ廃棄場にされてしまう）(図)。



それではどうすればいいのか？ 条例は対象集落の振興を目標として、定住対策と都市との交流促進をうたっている（第 3 条）。「定住促進の対策」では具体的にどんなことをするのだろうか。そこに住む

人に住宅整備の補助をする。150 万円の予算を改造に用いてもいいし新築するのに使用してもよい。そしてじっさいにこの制度を利用する人が現れてきた。定住者のばあいには毎月 5 万円を 1 年間払うが、こ

れは交通費、雪下ろし作業の補助でもある。空き家も多く存在した移住希望者もかなりいるが、持ち主が手放さないケースが多くむずかしい問題であるとのこと。

都市との交流の促進では、条例で指定された5集落を中心としてかなり動きが出てきている。市志ではヤマフキを栽培しているわけだが、ただ出荷しているだけではない。春先にはフキノトウ摘み体験ツアーを募集する。春先には積雪が多く残っていてバスは市野瀬からさきの谷川沿いの道は入れない。それで参加者は残りの3キロメートルを歩くことになるし、雪の下からフキノトウを掘り起こすことになる。市志の人はこんな大変な思いをしてまで参加する人がいるだろうかと思ったのだが、体験ツアーをやってみるとバスが2台になるほど人は来てくれる。フキノトウはとったその場で天ぷらにして食べてもらうし、家にも持って帰る。これだけのことで参加した人はみんな感動する。そこから都会の人との交流ができるし交流が広がる。

私たちが2011年に学生たちと訪れた古屋集落はトチの実拾いとトチ餅で交流イベントを組織している。古屋集落の住民は全員80歳台。背後の山奥にトチの大木からなる自然林があり秋になるとトチの実が沢山落ちるのが分かっているけれど、取りに行けない。じっさい、急な斜面で足場のわるい山道を小一時間歩かねばならない。それでシカの好物であるトチの実シカの食べるままになっていた。しかし、以前はトチの実を集めてトチ餅を作っていた。これをなんとか復活できないだろうか。そこで考えられたイベントが、都会の人たちと自然林の整備とトチの実拾いである。サポーターやボランティアにでもらってトチの大木のある自然林の周囲を柵で囲みシカやイノシシが入れないようにする。9月に

は週末ごとにトチの実拾いツアーを組織する。ヤマフキとはちがってトチの実はそのままでは食べられない。ゆでて皮から実を取り出すのも一苦労だし、とりだした実のあく抜きも大変。というわけでこれらの作業は古屋の人にまかせる。そして出来上がったトチ餅は綾部温泉で売られているし、阪急デパートのカatalogに載るようになっている。

なぜヤマフキの話やトチ餅のことをいうのか。四方八洲男にいわせると、国がやっている過疎対策はほとんど役にたっていないからなのである。過疎対策法は何度か期間を更新して36年間で76兆円という膨大な金額が投入された。けれどもこの金額はほとんど過疎地に通じる道路などインフラ整備に用いらただけなのだ。「本当に必要な産業とか、コミュニティ、文化を起こすとか、Iターン、Uターンの人を迎えるというような事業にはほとんど使われていない」。「道路、ハコモノに76兆円が投入されたがほとんどが建設関連。そのことで地方経済はうるおったが、肝心の過疎地、水源の里は置き去りにされていた」ということなのである（四方八洲男の話は、「日経グローバル」No.94, 2008年2月18日6-8頁および2007年夏の里山交流大学で私が聞いた講義から構成）。

これらの施策の経験から四方八洲男は、日本全国で同じように過疎高齢化対策の問題に取り組んでいる自治体に呼びかけて「全国水源の里連絡協議会」を結成し活動を進めているが、ここではこれ以上はたちいらない。

### 3 コーディネーターとしてのNPO

「水源の里条例」によって「限界集落」の活性化の動きが始まったわけだが、フキノトウ摘みツアーやトチの実拾いツアーはだれがどんなやり方で組織

するのだろうか。ここでNP0 法人「里山ねっと・あやべ」について語らなくてはならない。このNP0 法人の活動は綾部市の活動と密接に関係している。

「里山ねっと・あやべ」の所在地は綾部市でも豊里地区、鍛冶屋町というところだがこの場所は合併前の豊里村鍛冶屋で、ここには豊里西小学校があった。1950 年代後半にはこの小学校には220 から230 人の生徒がいたというが、1990 年代になると50 人を割り込んでしまう。それで豊里西小学校は東小学校と統合され市街地に近い場所に移った。集落の生徒たちはいまバス通学している。小学校の校舎はそっくり残ったわけだがこれをどうするか？ 綾部市では校舎の教室部分を改修しフローリングや畳の部屋にした。トイレも現代化し入浴設備も作った。つまり豊里西小学校校舎の外観はできるだけそのままに保ちながら近代的な宿泊研修センターに生まれ変わったのだ。そして綾部市はこの宿泊研修センターの運営をNP0 法人「里山ねっと・あやべ」の指定管理にしたのである。市側で対応するのは、定住促進課、水源の里・地域振興課、観光交流課であり、NP0 法人は12 人の理事からなる理事会と職員5 人の事務局で構成されている。（「里山ねっと・あやべ」の設立は2000 年、法人登記は2006 年）。予算規模は2012 年度収入・支出額は公表で2 千441 万6532 円となっている。

定款にある団体の目的は、綾部市の恵まれた自然環境や歴史、風土などすぐれた地域資源を活用し、学術・産業とも融和した新しい地域開発の在り方を研究し実践するため、舞台として里山空間がもっている「里山力」「人材力」「ソフト力」に支えられた都市農村交流から定住促進に向けて各種の事業に取り組み、次世代をになう青少年の健全育成をはかり、地域の活性化に寄与する、となっている。設立以来、

このNP0 法人が行ってきた主な活動には以下のようなものがある。石窯・パン焼き体験（2001 年から）、森林ボランティア体験活動（2001 年から）、農家民泊活動（2002 年から）、里山そば塾（2004 年から）、米作り体験（2004 年から）、茶摘み体験（2005 年から）、綾部里山交流大学（2007 年から）。とはいえこのNP0 の常勤事務局員は5 人しかいないからこれらの活動を全て事務局で担当することはできない。

それではどのように運営するのだろうか？ 森林ボランティアはNP0 事務局に本拠を置くグループである。小学校の裏山を初め豊里地区にはあらゆる場所に竹藪がある。これは里山に人手が入らなくなったせいでもあるが、この竹を伐採する。切った竹は切りそろえ乾燥させて炭焼き竈で竹炭にする。あるいは豊里から福知山に抜ける峠の古道がある。何十年も人が通らなかったため雑木に埋もれていたが、これをグループの人たちが雑木を伐採し遊歩道に整備した。これらの活動を毎月、都市部からやってくるサポーターの人びとと行うのである。

あるいは茶摘み体験はこうである。豊里地区の南に隣接する小西地区は戦後、お茶の栽培をするようになった。お茶栽培の農家は小西茶業組合を組織しているが、これと重なり合うように「夢クラブ小西」もある。NP0 はお茶摘みの時期になるとこれら団体と協力して、都市部の人びとに呼びかけお茶摘み会を開催する。もちろん、春の茶摘みだけでなく、大学生が地域振興実習でこの地区を訪れるときには、夏草に埋もれている茶畑で雑草取りの作業をする。茶畑は竹藪に接しているから、竹を伐採して事務局のある校庭に設置された竈での竹炭の原料にするし、また参加した学生には炭焼き作業もしてもらう。

「森林ボランティア」や小西地区のクラブだけでなく、志賀郷、<sup>はそうじ</sup>白道路、上林などの地区には同じよ

うに「奥山に桜を植える会」「神浪山麓ふるさと会」など沢山のグループがあり活動しているが、NPOはこれらのクラブやグループと連携し合って季節ごとのイベント参加を都市部の人びとに呼びかけ、実施するということを進めている。さきにのべた古屋のトチの実拾いのイベントもその一環である。こういうやり方での過疎地域と都市住民との交流の組織化はかなりうまくいっているように思われる。

#### 4 これらの活動からうまれる絆、人間関係

綾部市で初め「水源の里」対策として始まった活動はこのようにして「里山ねっと・あやべ」を軸とした地域振興の活動へと拡大していったわけだが、このように展開するとこの活動の中にいる人びとの間でも、また外からこの活動に入ってくる人びとの関係でも新しい関係と感覚が生まれてくる。

学生たちと行ってきた学外実習についていうと、私が初めて学生たちと「里山ねっと・あやべ」を訪れたのは2006年であった。初めの3回は「里山ねっと・あやべ」が森林フロンティアなど地域のグループや地元の有機農家と連携してつくった活動メニューにのせてもらったが、これでは毎年同じ内容の実習になってしまいおもしろくない。そこで里山交流大学で知り合った人びとをつてに志賀郷、上林、白道路というように毎年訪ねる地区を変え行う活動内容もちがうものにした。志賀郷では七不思議伝説巡りと登尾峠越え、上林では古屋のトチの実拾いとトチ餅づくり、白道路では秋祭り宵宮で石童丸物語の芝居を演じる機会までいただいた。それぞれについては学生たちの実習報告書に譲ることにして、これらの活動の中で気づいたことがある。

それは、いま、過疎高齢化の中にあるには違いないのだがこの地域はすごく国際的になっていること。

上林で農家民泊をやっている80歳の芝原キヌエさんのところにはアメリカやイタリアから女性客が一人で泊まりに来る。2・3日泊まって満足して帰っていく。芝原さんは、イタリア語はもちろん英語も話さないのだが、コミュニケーションは十分とれお互いに満足している。志賀郷にはスペインでフラメンコの修業をしてきた村上さんがいて教室をやり、お弟子さんたちとリオ・デ・ユラという名のグループであちこち公演してまわっている。白道路の安藤恵子さんは地元出身者であるが、1年の半分はオーストラリアで仕事をして、オーストラリアの高校生たちを山里に連れてくる。

このような形で地域の人たちも外国の人たちと日常的に混ざって一緒にいろいろ体験し考える。視野が広がっている。他者とのかかわることで視野が広がっている。中山間地域の村は閉ざされた地域共同体。みんな同じように因習にとらわれているとするイメージとはまったくちがった現実。もしそのようだったら都市の人たちとの交流などとてもできないだろう。

そしてここで3.11以後に出現する新しい人間関係と過疎の村の人びとのもとで生じていることが通底すると私は思う。東日本大震災の被災地支援ボランティアに沢山の人が行く。ボランティアは見ず知らずの人への「贈与」である。贈与論では、特定の相手との間で、贈与をしなければいけない。贈られたら受けとらなければいけない。受けとったらお返しをしなければいけない。モースの『贈与論』はそう論じる。すると被災地支援はお返しなしの「純粹贈与」だということになるのだろうか。しかし贈与が一方的になされる「純粹贈与」は依存と従属の関係しかうみださない。ボランティアは「純粹贈与」などではないのだ。震災はいつあるかわからない。

いまは東北の人が被災者だけど、今度は私たちが被災者になるかもしれない。支援は相互性なのだ。それが過去であるか未来であるか、いずれにせよお返しの意識からなされている。里山でいま取り組まれている過疎対策、都会との交流の試みが生み出しているのは、相互性の意識をはぐくみ発展させること、二つの人間関係はここでは同じになるのである。

杉山 光信（明治大学）